

理想自己・義務自己への意識傾向の測定¹⁾

— 自己目標志向性尺度の作成 —

小平 英 志²⁾

問題と目的

近年, Higgins (1987) の提唱した自己不一致理論 (Self-Discrepancy Theory) に関して, 日本でもいくつか研究が行われるようになった (例えば, 中江, 1990; 安田・佐藤, 2000; 小平, 2000, 2001)。Higgins は個人の自己評価基準 (自己指針) には理想的な領域と義務的な領域が存在するとしている。そして, 現実の自分がどちらからどれだけずれているかが, その個人が経験しやすい感情を説明するのだとした。理論によれば, 理想自己と現実自己の不一致は落胆と関連した感情と関係し, 義務自己と現実自己との不一致は動揺と関連した感情と関係する。

自己不一致理論が注目されてきた理由の1つとして, ユニークな自己不一致の測定方法が用いられている点があげられる。それまでの自己不一致に関する研究では研究者側が用意した属性リストに関して現実の自分と理想 (義務) の自分を評定させるという法則定立的方法が用いられてきた。これに対し Higgins は, 個性記述的な方法を積極的に用いた。自己不一致理論の仮説検証にしばしば登場する Selves Questionnaire (例えば, Higgins, Bond, Klein, & Strauman, 1986) では, 現実, 理想, 義務自己を示す言葉を10個記述するように求め, その記述された語の同意・反意関係から自己不一致の程度を測定する。つまり, 被調査者自身が記述 (リストアップ) する自己間の矛盾を不一致の指標とするわけである。言うまでもなく, この方法は被調査者1人1人について同意・反意・無関係を判別し, カウントするため, 非常に研究者側の負担が大きい。

このような手間のかかる測定をする理由は, Higgins が自己への accessibility を重視した点にある。Selves Questionnaire に記述された自己の属性は被調査者が自ら記述した属性であり, めったに意識しないような属性が出てくるとは考えられない。したがって, 手がかりなしに想起されて記述された自己の属性はその個人にとって利用可能な (available) だけでなく, より接近可能 (accessible) なものであると言える (Higgins, 1999)。このような自己不一致の測定法の工夫によって, 自己を構成する属性のうち, accessibility の高い属性を扱う事に成功したといえる。しかしながら諸属性によって構成される自己の領域は, 自己不一致理論によると理想自己と義務自己, そして現実自己の3つに分けられている。さらに属性のまとまりとしての自己のレベルでの accessibility を考慮する必要があるのではないだろうか。

小平 (2001) の面接調査の結果からは, 自分の目標の姿を「ありたい」と語る傾向のある個人と, 「あるべき」と語る傾向にある個人がいることが示唆されている。つまり, 特性として, 明らかに理想自己への accessibility が高い個人と, 義務自己への accessibility が高い個人がいると考えられる。また, 理想自己と義務自己を扱った研究においては, しばしば「義務自己とは何かわからない」「理想などは考えない」といった感想が見られる。どちらか片方の自己 (理想自己もしくは義務自己) を意識しない極端な例をいくつか確認することができるのである。

おそらく, 片方の自己への accessibility が高い個人は, 自己評価基準としてその自己を参照する機会が多く, また, 行動の指針・目標としてその自己を掲げやすい傾向にあると考えられる。したがって, 個人の自己指針への accessibility を明らかにすることによってその個人にとっての自己指針の参照の構造が明確になるのではないだろうか。さらに Higgins (1999) によると, 自己不一致と感情との関連に理想自己 (もしくは現実-理想不一致) と義務自己 (もしくは現実-義務不一致) への個人の特性的な accessibility が影響を及ぼすことが指

1) 本研究は, 名古屋大学大学院教育学研究科に提出した修士論文 (1999年度) の一部に加筆・修正を行ったものである。本研究の一部は日本教育心理学会第42回総会において発表された。

2) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程 (後期課程)

摘されている。以上のことから、自己指針の accessibility に注目し、特性的な accessibility を測定する尺度を作成することによって、特性的な accessibility を考慮に入れた動機づけ研究、自己不一致研究が可能となると考える。

ところで、理想自己、義務自己の意識しやすさを測定する尺度構成に際して、果たして理想自己と義務自己は弁別されるのかという問題が浮上する。石木(1996)によれば、理想自己への意識と義務自己への意識が高い相関関係にあることが示されている。これは理想自己と義務自己の上位概念である自己指針への意識として表れ易いことを示していると考えられる。したがって、理想自己と義務自己を弁別し、それぞれへの意識のしやすさを測定する尺度を構成するには、より弁別されやすい尺度が必要であると考えられる。

「こうあるべき」という義務的な表現からは、厳密にその目標が満たされることが期待されている様子がかがえる。例えば「医者になるべきだ」という義務の表現から、将来の不確かな願望というイメージは浮かばない。その個人によって、より近い未来に、それを実現することが期待されているのか、その目標に向かってすぐさま努力がなされるかのように感じられる。つまり、将来というよりもむしろ、現在や過去への焦点づけがなされている様子がかがえる。一方、「医者になりたい」という理想の表現から受ける印象は、その個人がより将来の目標として設定しており、なし遂げられるかどうかは不確かである。このような表現は「トラックの運転手になりたい」「お嫁さんになりたい」などといった、子供が将来の夢を語る際にも用いられる。これらからは、少なくとも、今すぐに努力をし始めるような目標ではないことがうかがえる。したがって、理想的な目標は、より将来に焦点づけられた目標だといえよう。本研究では、自己に関する理想的、義務的な目標意識の概念をより弁別的にとらえるために、以上のような時間的展望性(過去・現在志向か未来志向か)も尺度の概念に含めることにする。この時間的展望性を含めることによって、この尺度を評定する個人が理想的、義務的な自己指針の区別をはっきりと認識できるようになるのではないかと考えられる。

本研究では理想的・義務的な自己を参照する傾向を以下のように定義する。理想的な目標を意識・設定しやすい傾向(理想目標傾向)では自己指針を構成する記述やイメージが「こうありたい」とされる傾向が強く、自己に関する目的の実現をより遠い未来に設定し、自分が目標の自分であることを「望ましい」と考えている状態であると定義する。一方、義務的な目標を意識・設定しやすい傾向(義務目標傾向)は、目標を比較的近い未来に

設定し、常に自分の想定する水準を満たしておこうとする傾向、現在の状態に対して神経を使い、その自分の状態を守ろうとしている傾向であると定義する。これらの定義に基づき、尺度化を試みることにする。

また、本研究では、以上の定義から、妥当性の検討として時間的展望に関する尺度を用いる。特に、義務目標傾向とは対照的に、理想目標傾向の未来展望的な側面が確認されることが予想される。また、義務目標傾向は、神経症的傾向の背景として存在するとされる不合理な観念と強い関連を示すことが予想される。また同時に、理想自己と義務自己に対応させた完全主義を想定した辻(1992)の完全主義尺度との関連も検討する。

方 法

調査対象 愛知県内の国立・私立大学及び短期大学に通う学生189名(男性44名、女性145名、平均年齢20.04歳)を対象に実施された。

質問紙 ①自己指針測定のための質問票 本研究で作成される自己目標志向性尺度の収束的妥当性を検討するために、被験者が自己指針の記述に「ありたい」「あるべき」のどちらの語尾を付ける傾向にあるのかを測定した。まず、「あなたが目標とする自分の状態を、言葉で表すとどのような言葉になりますか。」という教示のもとに自分の目標の状態を10個記述するように求めた。その際、「人間」という言葉で終わるように回答を求めた。なお、どうしても10個記述できない場合は記述した分についてのみ次の作業をするように教示した。次に、「それぞれの記述に関して、「(人間)でありたい」「(人間)であるべき」のどちらかを付けるとしたらどちらがあなたの考える目標を良く表していると思いますか」という教示のもとに「でありたい」「であるべき」「どちらとも言えない」のいずれかに、それぞれの記述について丸をつけるように求めた。

②完全主義尺度 辻(1992)の作成した理想追求的、失敗回避的完全主義、及び強迫的努力に関する尺度を用いた(16項目)。理想追求的完全主義の尺度は理想自己に対応し、より高い基準に対する完全性を測定するもので、一方、失敗回避的完全主義の尺度は義務自己に対応し、失敗を犯さないことに対する完全性を測定するものである。また、強迫的努力は、これらの努力を継続的に行うような傾向を測定する尺度である。それぞれの項目について、「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」までの5件法で回答を求めた。理想追求的完全主義の5項目の合計を理想追求得点(平均15.00, 標準偏差3.72, $\alpha = .71$), 失敗回避的完全主義の5項目を失敗回避得点(平均13.60, 標準偏差3.67, $\alpha = .64$), 強迫

的努力の4項目を強迫的努力得点(平均13.90, 標準偏差2.73, $\alpha = .61$)とした。

③時間的展望体験尺度 白井(1994)の時間的展望体験尺度を用いた(18項目)。「現在の充実」「目標指向性」「過去受容」「希望」の4つの下位尺度からなる。それぞれの項目について「あてはまらない」から「あてはまる」までの5件法で回答を求めた。「現在の充実」「目標指向性」「過去受容」「希望」に関する項目の合計をそれぞれ「現在の充実」得点(平均15.78, 標準偏差4.37, $\alpha = .80$), 「目標指向性」得点(平均15.30, 標準偏差4.50, $\alpha = .79$), 「過去受容」得点(平均13.37, 標準偏差3.01, $\alpha = .63$), 「希望」得点($\alpha = .79$)とした。

④自己目標志向性尺度 本研究の定義および自己不一致理論における理想自己, 義務自己に関する記述を参考に, 理想的な目標設定(理想目標)に関する項目, 義務的な目標設定(義務目標)に関する項目を, それぞれ10個目ずつ独自に作成した。それぞれの項目について, 「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」までの5件法で回答を求めた。

⑤日本語版 Irrational Belief Test (自己期待尺度) 義務目標と神経症傾向の指標とされる不合理的信念との関連を検討するために, 松村(1991)によって作成された Irrational Belief Test を用いた。本研究では, この尺度の下位尺度である「自己期待」の10項目を用いた。これは自己に対する過度な期待を測定するもので, 例えば, 「私は欠点のない人間でなければならない」な

ど, 全て「～ならない」という形で終わる項目からなる。それぞれの項目について「まったくそう思わない」から「まったくそう思う」までの5件法で評定するように求めた。全10項目の合計を自己期待得点(平均21.99, 標準偏差8.47, $\alpha = .93$)とした。

手続き 調査は以上の順番で, 授業中に集団で実施された。所要時間は約15分ほどであった。

調査時期 1999年11月中旬に実施された。

結 果

1. 自己目標志向性尺度の項目分析及び因子分析

自己目標志向性尺度の項目分析 新しく作成した尺度の全ての項目について, 得点分布を検討した。その結果, 全ての項目に対して両端(評定値1と評定値5)の分布が35%未満であった。全ての項目に対する評定が極端に歪んだ分布を示してはいないと判断し, 全項目を以後の分析に用いた。

自己目標志向性尺度項目の因子分析 作成した20項目に対して因子分析を行った。固有値の減衰状態及び2つの因子を仮定していたことから因子数を2とし, 再び因子分析を行った。各因子への負荷が.50に満たない5項目(「4. 自分の理想の姿を考えたときに, それは遠い未来のことのような気がする」「7. 自分が置かれている状況では, 自分が何をすべきかを意識するようにしている」「12. 自分の欠点に気が付いた時, 今すぐにも直さなくてはいけないと感じる」「13. 将来の目標を立

Table 1 自己目標志向性尺度の因子分析結果(主成分分解, promax 回転)

	I	II
2. 「自分はこういう人間でなくてはならない」とよく意識する	.79	-.02
17. 常に守らなくてはいけない自分の状態というものをよく考える	.77	-.07
4. 「私はこういう人間であるべきだ」とよく考える	.75	-.10
8. いつも自分が自分の考える「あるべき姿」であるようにと気を使っている	.71	.01
15. 自分はどういう人間でなくてはいけないかがはっきりしている	.71	-.02
16. 自分が今, 果たすべき役割は何かをよく考える	.67	.05
19. 自分には満たしておかなくてはならない水準がある	.69	.18
6. 「自分は少なくともこの程度はできていないといけない」とよく意識する	.65	.01
1. 私の考える理想の自分の状態とは, 長い時間をかけて近づいてゆくようなものだ	.14	.64
20. 毎日, 少しずつでも自分の目指す目標に近づく事ができたらそれでよいと思う	.05	.65
3. 自分の欠点は長い時間をかけてゆっくりと直してゆけばいいと思う	-.22	.58
14. すぐにはかなえられそうもない夢だとしても, それを自分の目標としようとする	.31	.55
11. 目標はいつかかなえられれば, それでいいと思う	-.25	.58
9. 今すぐに自分の目標を達成できなくても仕方がないと思う	-.19	.54
10. たとえ失敗しそうな時でも, うまくいく可能性があるならばそれを続けようと思う	.20	.49
因子間相関	I	II
	I	-.03

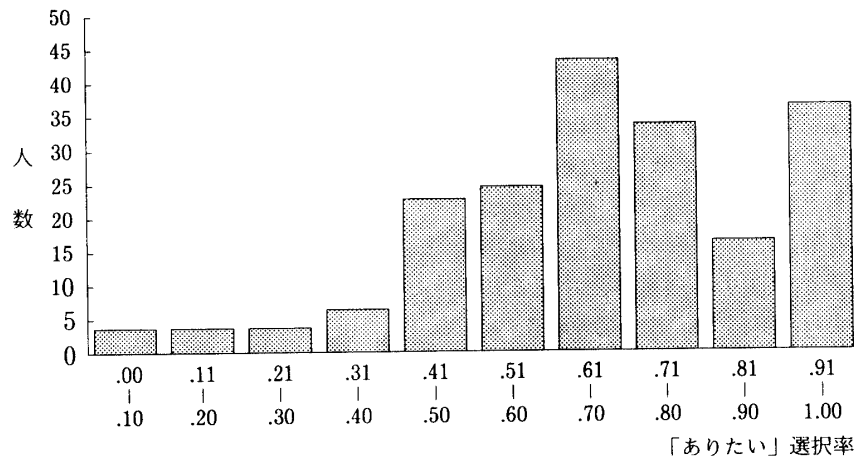


Fig. 1 「ありたい」選択率と人数分布

て、それに近づこうしている」「18. 自分は、将来、どのような人間になりたいのかをよく考える」)を除外して、残りの15項目に対して因子分析(主成分法, promax回転)を行った。因子パターンをTable 2に示す。なお、2因子に対する15項目の累積寄与率は45.59%であった。

第1因子には、「自分はこういう人間でなくてはならないとよく意識する」「常に守らなくてはいけない自分の状態というものをよく考える」といった義務目標に関する項目で負荷が高かった。この因子に.50以上の負荷を示す8項目は全て義務目標に関する項目であり、第1因子を「義務目標」と命名した。第2因子には、「私の考える理想の状態とは、長い時間をかけて近づいていくようなものだ」「自分の欠点は長い時間をかけてゆっくりと直してゆけばいいと思う」といった理想目標に関する項目で負荷が高かった。この因子に.50以上の負荷を示していた項目は全て理想目標に関する項目であり、第2因子を「理想目標」と命名した。「義務目標」因子に負荷の高い8項目を義務目標尺度とし、その合計得点を義務目標得点とした(平均24.40, 標準偏差6.44)。また「理想目標」因子に負荷の高い7項目を理想目標尺度とし、その合計得点を理想目標得点とした(平均27.08, 標準偏差3.64)。これら、義務目標尺度、理想目標尺度の2尺度を自己目標志向性尺度とした。

次に、義務目標尺度、理想目標尺度に関してそれぞれ α 係数を算出した。義務目標尺度(8項目)では.87、理想目標尺度(7項目)では.67の α 係数が得られた。義務目標尺度では十分な信頼性が確認されたが、理想目標尺度では、 α 係数はやや低い値であった。

2. 併存的妥当性の検討

目標として記述した自分の状態に「でありたい(理想)

と「であるべき(義務)」のどちらを付ける傾向にあるのかを別の指標として用い、作成された尺度の妥当性の検討を行った。自分の目標として10個全て記述した被験者は全体の77%で、98%の被験者は5つ以上の記述をしていた。それぞれの被験者毎に、全体(「ありたい」と回答した数と「あるべき」と回答した数の和)に対して「ありたい」を付けた割合を算出した。「ありたい」とする割合の人数分布を示したのがFig. 1である。61%から70%の記述に「ありたい」と付ける被験者が最も多く、次いで、91%から100%の記述に「ありたい」と付ける被験者が多かった。傾向としては「あるべき」よりも「ありたい」という語尾が付けられることが多く、割合の平均は「あるべき」:「ありたい」=0.29:0.71であった。そこで、この平均を基準とし、「あるべき」を全体の29%よりも多く記述している(つまり「ありたい」を全体の71%より少なく記述している)被験者をHO群、「あるべき」の記述が全体の29%以下の(つまり「ありたい」を71%以上記述している)被験者をHI群とし、2群に分けた。例えば、「ありたい」が3つ、「あるべき」が2つ「どちらとも言えない」が3つの計8つの記述をしていた被験者は、 $2/(2+3)=.40$ で40%「あるべき」を記述しているので、HO群と分類された。

次に、HO群とHI群の間で、義務目標得点、及び理想目標得点の差の検定をそれぞれ行った(Fig. 2)。t検定の結果、義務自己得点では0.1%水準で有意であった。すなわち、「あるべき」という目標が多いほど(「ありたい」としないほど)義務目標得点が高いという結果が得られた。一方、理想目標得点では、有意な差は得られなかった。得点を見ると、HI群の方がHO群よりも理想目標得点が高く、仮定された方向の結果ではあるものの、その差は統計的に有意ではなかった。

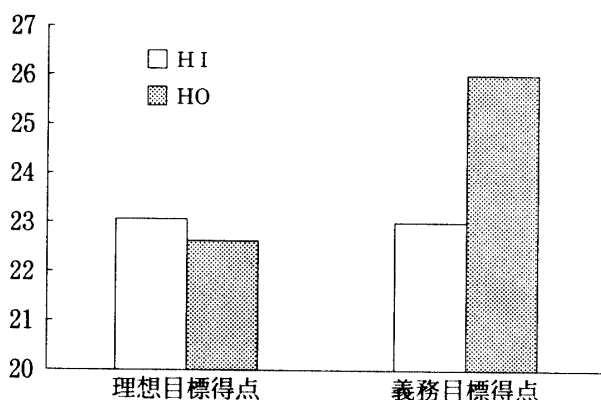


Fig. 2 HI群とHO群の理想・義務目標得点平均

3. 他尺度との関連の検討

完全主義尺度、時間的展望尺度、自己期待尺度を用いて、自己目標志向性尺度との関連から、妥当性の検討を行った。全ての質問項目に欠損のなかった182名を対象に、自己目標志向性尺度と、完全主義尺度、時間的展望尺度、自己期待尺度との間で、ピアソンの積率相関係数を算出した (Table 2)。

まず、理想目標尺度では、完全主義の失敗回避得点と微弱ながら有意な負の相関係数が得られた。また時間的展望尺度の全ての側面と正の相関関係にあることが示された。また自己期待得点とは有意な負の相関係数が得られた。

また、義務目標尺度では、完全主義の理想追求得点、強迫的努力得点と有意な正の相関係数、時間的展望尺度の過去受容と負の相関係数、また目標指向性及び希望と正の相関係数が得られた。また自己期待得点との有意な正の相関係数も得られた。

考 察

本研究の目的は、目標の自己 (自己指針) を「こうありたい」と意識する傾向 (理想目標)、「こうあるべき」と意識する傾向 (義務目標) を測定する尺度をそれぞれ作成することであった。

1. 自己目標志向性尺度の項目選定

まず、本研究の定義及び自己不一致理論を参考に作成された項目に対して、因子分析を行った。その結果、理想目標と義務目標の項目が仮定されていたとおりに2つの因子に分かれた。各尺度項目で α 係数を算出したところ、義務目標尺度では満足いく値が得られたものの、理想目標尺度では α 係数がやや低かった。また、個人の重要な自己指針 (漠然とした目標として被調査者に記述を求めたもの) を構成する属性語が「ありたい」「あるべき」のどちらとして記述される傾向にあるのかを指標に、妥当性の検討を行った。その結果、自己指針の記述に対して「あるべき」と記述する頻度が多い個人ほど、義務目標尺度得点が高いという結果が得られた。一方、「ありたい」と記述する頻度が多い個人ほど理想目標尺度得点が高いと予想されていたものの、この傾向が統計的に確認されるにはいたらなかった。これらの結果から、義務目標尺度の信頼性、妥当性は検証されたといえるものの、理想目標尺度においては、十分に検証されたとはいえなかった。その理由として、個人の目標のうち、平均で7割の記述が「ありたい」とされることから、全体的に「ありたい」とする者が多く、本研究で作成された理想目標尺度では識別力が弱いことが考えられる。また、本研究では、自己指針の記述に関して「ありたい」「あるべき」のどちらかを付けるように教示したため、これらの割合は相互規定的であった。一方、理想目標得点と義務目標得点は負の相関関係にはなく、因子間相関はほぼ無相関であった。したがって、これをもって両尺度の妥当性を検討するのは難しかったのではないかと考えられる。今後、尺度の見直しと同時に、他の方法を用いた妥当性の検討も行う必要があると考えられる。

2. 完全主義、時間的展望、自己期待との関連

各尺度間の相関係数は、義務目標尺度と理想目標尺度の妥当性を支持する方向にあると解釈可能であった。まず、理想目標尺度では、完全主義の失敗回避得点と有意な負の相関、時間的展望尺度の全ての側面と正の相関、自己期待との負の相関が得られた。これらのことから、

Table 2 各変数間の相関係数 (N = 182)

	完全主義尺度			時間的展望尺度			Irrational Belief test 自己期待	
	理想追求	失敗回避	強迫的努力	過去受容	目標指向性	希望		現在の充実
理想目標	-.04	-.16*	.01	.21**	.23**	.26***	.25***	-.21**
義務目標	.55***	.10	.50***	-.20**	.30***	.17*	-.01	.57***

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

理想目標尺度の非強迫的側面、また、過去、現在を受容し、将来の目標へと動機づけられる傾向を裏付けているといえよう。

また、義務目標尺度では、完全主義の理想追求と強迫的努力のそれぞれと有意な正の相関、時間的展望尺度の過去受容と負の相関、目標指向性及び希望と正の相関、自己期待との有意な負の相関が得られた。義務目標は強迫的にある一定の自分の状態を維持しようと目標を設定する傾向であり、完全主義得点の下位尺度である理想追求及び強迫的努力と負の相関が得られたことからその傾向は支持されたといえよう。また、過去受容と負の相関を示したことから、過去の失敗体験や否定的な出来事にこだわり、自分を戒める傾向が義務目標尺度に反映されていると考えられる。また、自己期待と正の相関を示したことから、自分にある水準を満たしておこうとする傾向が義務目標尺度によって測定されていると考えられる。

完全主義の3つの下位尺度では、理想目標得点と失敗回避得点との間に負の関連、義務目標得点と理想追求得点、強迫的努力得点との正の関連が確認された。失敗回避得点では、理想目標と負の関連にあったものの、義務目標と有意な相関が得られなかった。辻(1992)では義務自己と対応する完全主義としてこの失敗回避的な側面を提唱しているが、尺度の名称通り「べき」という観念への意識よりも義務自己の失敗回避的な側面に焦点付けている。失敗回避的な傾向は義務自己を追求した結果の1つの形ではあるものの、「べき」観念への意識が必ずしも失敗を回避する傾向には結びつかないと考えられる。「べき」という目標を意識し、それを満たせていない(不一致である)場合は、失敗回避的な目標意識としてとらえるであろうが、逆に満たせている個人にとっては、その「べき」目標は失敗回避的な目標意識となるとは限らないのではないだろうか。推測の域を出ず、今後の課題ともなる部分ではあるが、少なくとも、義務目標と失敗回避的完全主義とが対応がしないという本研究の結果は、義務目標尺度の妥当性を疑う結果ではないと考えられる。また、一方で、理想追求得点が理想目標得点ではなく義務目標得点と正の関連を示していた。これは、理想追求傾向の項目に、「満足できない」「終わりにたくない」「気が済まない」といった、目標の状態を過度に追い求める様子が反映されているためだと考えられる。理想追求の求めるとはいえ、あくまでも完全主義の1側面を測定する尺度であり、このような理想の過度な追求は、本研究の義務目標尺度に含まれる側面であったと考えられる。以上、辻(1992)の尺度とは完全に対応はしないものの、相関係数からは自己目標指向性尺度の定義から十分解釈可能な結果が得られたといえる。

これらの尺度間の相関を見る限りは、本稿で定義され

た義務目標傾向、理想目標傾向はそれぞれ義務目標尺度、理想目標尺度として反映されているといえよう。今後、特に理想目標尺度に関して、その信頼性と妥当性に関する検討が課題であると思われる。

引用文献

- Higgins, E.T. 1987 Self-discrepancy theory: A theory relating self and affect. *Psychological Review*, **94**, 319-340.
- Higgins, E.T. 1999 When do self-discrepancies have specific relations to emotions?: The second-generation question of Tangney, Niedenthal, Covert, and Barlow (1998). *Journal of Personality and Social Psychology*, **77**, 1313-1317.
- Higgins, E.T., Bond, R.N., Klein, R., & Strauman, T. 1986 Self-discrepancies and emotional vulnerability. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 5-15.
- 石木道世 1996 「こうあるべき」という意識と「こうありたい」という意識に関する一考察 日本教育心理学会第38回総会発表論文集, 207.
- 小平英志 2000 理想自己・義務自己の機能的差異に関する研究—自己不一致を介した自己肯定・否定感との関連を中心に— 名古屋大学大学院教育学研究科修士論文(未刊)
- 小平英志 2001 日常生活で活性化される自己不一致—大学生を対象とした面接を通して— 教育心理学論集, **30**, 21-33.
- 工藤恵理子 1990 現実自己, 理想自己, あるべき自己, なり得る自己とその達成感と抑鬱との関連について 日本心理学会第54回大会発表論文集, 186.
- 松村千賀子 1991 日本語版 Irrational Belief Test (JIBT) 開発に関する研究 心理学研究, **62**, 106-113.
- 白井利明 1994 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 心理学研究, **65**, 54-60.
- 辻平次郎 1992 完全主義の構造とその測定尺度の作成 甲南女子大学人間科学年報, **17**, 1-14.
- 安田朝子・佐藤徳 2000 非現実的な楽観傾向は本当に適応的といえるのか—「抑圧型」における楽観傾向の問題点について— 教育心理学研究, **48**, 203-214.

(2001年9月20日 受稿)

ABSTRACT

A development of the scale assessing chronic accessibility
to the ideal and the ought self.

Hideshi KODAIRA

In this study, scales of chronic accessibility to the ideal and the ought self were developed. The questionnaire about self-guides, perfectionism, time-perspective, irrational belief (self-expectation), and chronic accessibility was administered to 189-university students. Factor analysis on items about chronic accessibility showed two factors: accessibility to the ideal self and the ought self. Participants described self-guide more "ought to" showed high score of scale about accessibility to the ought self. But there was no significant about accessibility of the ideal self. Accessibility to the ideal self related to low perfectionism about avoidance of failure, acceptance of past, goal-directedness, hopefulness, self-fullness, and low self-expectation. While, accessibility to the ought self related to perfectionism about pursuit of ideal, obsessional effort, low acceptance of past, goal-directedness, hopefulness, and self-expectation.

Key words : chronic accessibility, ideal self, ought self, self-discrepancy Theory.